百留康晴（ひゃくとめ やすはる）

学位の種類	博士（文学）
学位記番号	文博第 172 号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科（博士課程後期3年の課程） 言語科学専攻
学位論文題目	**現代日本語複合動詞の通時論的研究**
論文審査委員	（主査） 教授 村上雅孝　教授 齋藤倫明 教授 小林　隆 助教授 大木一夫 教授 才田いずみ

論文内容の要旨

本研究は「走り去る」や「持ち上げる」など「動詞＋動詞」型の複合動詞がいかなる史的変遷のもと、現在のような形態となったのかということを明らかにしようとするものである。そこでは個別的な語例をもとに考察することは言うまでもないが、それを超えて、集合体、カテゴリーとしての複合動詞の性格及び史的変遷の結果としての現在を明らかにするというところに重点を置く。また、語法、意味の面、動詞間の構成の面からの考察にとどまらず、音声、結合度といった形態的な側面にも注目し、その史的変遷の全体像を総合的に明らかにしたいと考える。

本研究の構成は以下のようなものである。第一章では本研究の目的と方法について述べる。第二章では古代語を中心とした複合動詞研究史をまとめる。複合動詞研究においてこれまでどのようなことが問題とされてきたのか、また、どのようなことが明らかにされてきたのかについて述べる。第三章では先行研究に拠りつつアクセント等を中心として音声面に見られる変化を明らかにする。第四章では具体的な意味を失い抽象的な動作を表わすようになったものの各時代における性格の変化を明らかにする。第五章では複数の動詞の構成に見られる全体的な変化を明らかにする。第六章ではこれまでの考察を踏まえ、複合動詞の史的変遷にどのような傾向が見出せるのか、ということをまとめる。また、その結果としての現代語複合動詞の本質について述べる。

本研究は以上の目的、方法のもと、なされるが、複合動詞の史的変遷を明らかにすることは日本語史の解明に大いに資することである。それは以下のような理由による。日本語は述語の重要度が高い言語であると言われる。最後まで聞かなければ内容が完全には分らないと言われるのもこのためである。主

語や目的語は時に省略されることがあるが、述語が省略されることは無い。これは古代語に関しても現代語に関しても変わらぬ特徴として指摘することができよう。そのような日本語の述語において重要な役割を担うのは用言であり、その中でも多くを占めるのは動詞である。したがって、動詞を研究することには日本語の構文及びそれによって広がる表現の世界を明らかにする上で多くの意義が存する。

その動詞を語構成意識によって分類した場合、多くを占めるのは、それ以上意味のある要素に分割することのできない単純動詞である。しかし、それに次いで生産性を有するのは、本研究で取り上げる「動詞＋動詞」型の複合動詞及び「名詞＋する」の形を取るサ変動詞である。また、そのような量的な側面だけでなく、個々の複合動詞は複数の単純動詞に分析でき、より複雑な意味内容を担うことのできる語である。以上、述べてきたように複合動詞は現代日本語の動詞表現において重要な役割を担っていると言え、その史的変遷を明らかにすることは日本語史全体を明らかにする上でも少なからぬ意義があると考える。

それでは章ごとに内容について述べる。第二章では複合動詞の研究史について述べた。研究史を振り返ると昭和二〇年以前には複合動詞を専門的に取り扱った論考は少なく、複合語研究の一環として、あるいは、文法論の一部として言及されたものが中心である。そこで、どのように複合動詞が捉えられているかについては関一雄（一九七七）『国語複合動詞の研究』笠間書院に詳しい。複合動詞を専門的に分析したものに関しては有坂秀世（一九三五）「不可能を意味する「知らず」について」『藤岡博士功績記念言語学論文集』岩波書店、石田春昭（一九三六）「アリクの意味とシアルク」『国語研究』四―三、林和比古（一九四四）「補助用言とその派生問題について」『国語学論集』岩波書店など、後項の補助動詞化に着目したものが散見されるに過ぎない。

昭和二十年以降には個々の複合動詞の語法を明らかにしようとするものに加え、金田一春彦（一九五三）「国語アクセント史の研究が何に役立つか」『金田一博士古稀記念言語・民俗論叢』三省堂、吉澤典男（一九五二）「複合動詞について」『日本文学論究』一〇、桜井茂治（一九六〇）「平安・院政時代における「複合動詞」―関一雄氏の論文を読んで―」『国語と国文学』三七―七など、アクセントなどを根拠として形態的なまとまりに言及するものが目立つ。しかし、多くは個別的な語法の解明を主とする論考が占め、関一雄（一九五八）「中古中世のいわゆる複合動詞について―源氏・栄花・宇治拾遺・平家の四作品における―」『国語学』三二、関一雄（一九六〇）「いわゆる複合動詞の変遷」『国語と国文学』三七―二を除けば、全体の語構成における傾向の解明を志向するものは殆どないといった状態であった。

昭和四〇年代半ばには現代語の複合動詞のみを対象としたものであるが、寺村秀夫（一九六九）「活用語尾・助動詞・補助動詞とアスペクト」『日本語・日本文化』一が発表された。ここで提案された構成要素の意味や自立性に基づく左の四分類は単なる意味や語法の解明ではなく複合動詞の構成要素間における関係の体系化を図ったという点で画期的なものであり、その後の現代語複合動詞研究に大きな影響を与えた。その詳細については斎藤倫明・石井正彦（一九九七）「研究史的素描―語構成論において取り扱われ〈てきた／ている／るべき〉こと―」『語構成』ひつじ書房、に詳しい。

a　自立Ｖ＋自立Ｖ
b　自立Ｖ＋付属Ｖ
c　付属Ｖ＋自立Ｖ
d　付属Ｖ＋付属Ｖ

しかし、歴史的研究に関しては寺村の示した四分類は生かされず、語法面の解明に終始した論考が目立つ。また、それはそのような立場を擁護した、こまつひでお（一九七五）「音便機能考」『国語学』一〇一、関一雄氏の一連の論考をまとめた関一雄（一九七七）『国語複合動詞の研究』笠間書院の存在も大

きい。昭和五〇年代以降、現代語複合動詞研究との方法論上での乖離が目立っていく結果となった。さらに、歴史的研究の分野に関してはある特定の資料における複合動詞の語彙的な側面を解明するものが現れた。松田三千代（一九七七）「紫式部日記の複合動詞」『成蹊国文』一〇、藤井俊博（一九八九）「続記宣命の複合動詞―漢語との関係を中心として―」『国文学論叢』三四、藤井俊博（一九九〇ａ）「今昔物語集の翻訳語について」『国語語彙史の研究　十一』和泉書院、藤井俊博（一九九〇ｂ）「今昔物語集の語彙形成―複合動詞の構成を通して―」『同志社国文学』三四、藤井俊博（一九九一）「説話文学の複合動詞　基調語彙の一側面として」『国文橘』一八、岡野幸夫（一九九九）「『あきぎり』の複合動詞語彙にみる時代差と文体差」『鳥取女子短期大学研究紀要』四二、岡野幸夫（二〇〇〇）「『とはずがたり』の複合動詞―数量的概観―」『鎌倉時代語研究二三』武蔵野書院、岡野幸夫（二〇〇一）「『和泉式部日記』の複合動詞」『鳥取女子短期大学研究紀要』四三、などがそれである。

複合動詞の研究史をたどると先行研究はその多くを特定の構成要素の意味や機能を明らかにしようとするもの、特定の語の意味や表現性を明らかにしようとするものとによって占められており、その成果はあまりにもこまごまとしたものである。そこで、研究史を概観するに当り、これまで歴史的分野においては複合動詞をどのようなものとして捉えられてきたのか、全体の語構造に関してどのようなことが明らかにされてきたのか、この二点に絞って述べることにしたい。

複合動詞をどう捉えるかについては金田一春彦氏、吉澤典男氏、桜井茂治氏らによるアクセント・連濁・助詞が介入するか否かといった諸特徴から判断される形の面のまとまりを問題にする見方と、関一雄氏、小松英雄氏らによる意味のまとまりを重視する見方とがある。しかし、現在の意味論的考察の分野では意味のまとまりを重視する見方が優勢である。

また、語構成に関して明らかにされてきたことについては、主に自動詞、他動詞の別からの分析、『分類語彙表』の意義範疇を利用した分析、動詞の持つ《動作》《変化》《状態》といったカテゴリカルな意味を利用した分析を取り上げ、その成果を示した。自他の別に関しては各時代を通じて他動詞同士、自動詞同士の結合が多数を占めていることが関一雄氏によって明らかにされた。『分類語彙表』の意義範疇を利用した分析では、以下のことが東辻保和氏、犬飼隆氏によって明らかにされた（東辻保和（一九七五）「いわゆる複合動詞後項の意義論的考察―源氏物語を資料として―」『国文学攷』六九、犬飼隆（一九八八）「平安末期複合動詞の意味構造―『分類語彙表』を利用する方法の試み―」『国語語彙史の研究九』和泉書院）。「抽象的関係」「精神および行為」「自然現象」の三つの意義範疇のうち「抽象的関係」に属す動詞は後項に立つことが多く、また多くの複合動詞を形成し得る。「自然現象」に属す動詞によって形成される複合動詞は少数である。「精神および行為」に属す動詞は前項に立つことが多い。

動詞の持つ《動作》《変化》《状態》といったカテゴリカルな意味を利用した分析では、現代語において石井正彦（一九八三ａ）「現代語複合動詞の語構造分析における一観点」『日本語学』二―八、石井正彦（一九八三ｂ）「現代語複合動詞の語構造分析―《動作》・《変化》の観点から」『国語学研究』二三において、石井正彦氏が指摘したのと同様、古代語においても前項に〈動作〉、後項に〈変化〉の意を有する要素の占める割合が圧倒的に高いことが大島悦子（一九九六）「「複合動詞」構成要素間の関係性について―『源氏物語』における「複合動詞」の場合―」『早稲田日本語研究』四、によって明らかにされた。しかし、同氏によればそのような結合の中には現代語とは異なり、次のような［実現形態］→［結果内容］という関係性を有しない意味構造が多く含まれているとされる。つまり、次の例の「見集む」は《見たことによって集めるという動作が引き起こされ、そのような結果が実現した》と解することは困難である。そこが現代語との違いであるとする。

・おほえぬたかきましらひをしておほくの人をなむ見集むれと殿のうへの御かたちにこにる人おはせしとなむとしころみたてまつるを（源氏物語・玉蔓）

第三章では音韻史に関する先行研究に拠りつつアクセントを中心に音声の面に現れた変化を明らかにした。金田一春彦氏・吉澤典男氏、桜井茂治氏らによって明らかにされた平安時代後期のアクセント史料である『類聚名義抄』のアクセントでは、それぞれの動詞のアクセントをそのまま接続したものである。また、それは築島裕（一九五一）「淨辨本拾遺和歌集所載のアクセントに就いて」『国語アクセント論叢』法政大学出版局、によって明らかにされた中世前期のアクセントを反映していると見られる『淨辨本拾遺和歌集』において声点が付された言葉から推測されるアクセントに関しても同様である。

そして、中世後期のアクセントを反映するとされる『補忘記』、近世のアクセントを反映するとされる『平曲譜本』には、アクセントの高く発音される部分が一つになるように調整された新しいアクセント、接合型アクセントが見られる（上野和昭（一九八九）「近世における複合動詞のアクセント」『国語学研究と資料』一三、上野和昭（一九九〇）「平曲譜本にみえる動詞の接合アクセントについて」『徳島大学国語国文学』三）。したがって、中世後期に至るまではそれぞれの動詞のアクセントをそのまま発音したものであったが、中世後期以降それが変化したものと推定される。そして、秋永一枝（一九九六）「東京・芦安両アクセントにみる接合型の衰退」『国文学研究』一一八、上野和昭（一九九七）「接合アクセントから結合アクセントへ―徳島市内における複合動詞アクセントの調査から―」『島田治還暦記念論文集　言葉と文化』島田治還暦記念論文集刊行会、によればそのようなアクセントは現在でも各地の方言に残っているとされる。したがって、そのようなアクセントは複合動詞が語と同じように十分な形態的なまとまりをもって使用されていたと判断されるものである。そして、各地の方言におけるアクセント変化の結果から、このようなアクセントは、その後、単純動詞と同じアクセント型へと移行したものと推測される。

第四章では意味派生における変化を明らかにした。現代語においては複合動詞後項「―出す」「―続ける」は他の動詞に《開始》《継続》などの文法的な意味を添える機能を持っている。また、「恐れ入る」や「恥じ入る」における「―入る」は《外から内への位置変化》という本来の意味を失い、強調の意を添えるものとなっている。そのような意味派生がどのように発生したのかということについて考察した。

その結果、これらの意味で使用された「―出す」「―続ける」「―入る」は中古の資料では見出せず、中世以降の資料でしか見出せなかった。そして、それがどのような要因によって派生したかに関しては以下のことが考えられる。これらのうち「思う」や「言う」や「聞く」など具体的なモノと結びつかない動詞と結合したものは使用され続けるうちにそれがどのような意味を担っているのかということが分かりづらくなっていったと思われる。「運び出す」などの「―出す」は具体的で意味内容が捉えやすいが「思い出す」の「―出す」はあまり具体的でなく、その意味内容が不明確である。つまりこのような意味の違いが新たな意味を生む下地となったのではないかと考えるのである。既存の結合の中に新たな意味が生じ、その構造を利用した新たな語が生まれることによってその意味が確立したと考える。

第五章では複合動詞における構成法の変化を後項動詞の生産性の推移から明らかにした。その結果、中古においては自動詞の生産性が高かったもののそれが時代が下るにつれ、衰退し、他動詞の生産性が高くなったことを明らかにした。これは中古においては二つの動詞の主語が異なる結合をも許容されていたのに対し、中世以降そのような表現が許容されなくなった結果を反映したものであると考えられる。

第六章ではそれまでのまとめを行った。第三章、第四章、第五章において明らかにした結果に基づいて複合動詞の史的変遷における傾向をまとめると、緩やかな連合体から緊密に結び付いた複合語へとい

う変化が見出せる。

音声の面においては、複合動詞のアクセントは中世後期までは少数の例外を除き、それぞれの動詞のアクセントをそのまま発音したものであったと推定される。したがって、それぞれの構成要素の独立性は高く、形態的には複数の動詞を連ねたものとなんら違いは認められない。また、同時期の「名詞＋動詞」型の複合動詞には後項の連濁が認められるものの「動詞＋動詞」型の複合動詞には連濁が見られない。このことも同様の結論を導き出す。なお、小松英雄（一九七七）「アクセントの変遷」『岩波講座日本語五　音韻』岩波書店、山口佳紀（一九八二）「語形・語構成」『講座日本語の語彙一　語彙原論』明治書院、によって指摘された例外的なものに関しては個別的な検討を要する。

中世後期から近世にかけては接合型と呼ばれる、アクセントの高く発音される部分が一つになるように調整された新しいアクセントが現れる。それはつまりそれらの表現がある程度まとまりを強めた状態であると判断される。また、柳田征司（一九九三）『室町時代語を通して見た日本語音韻史』武蔵野書院、二八頁では「中世末期の口語資料、抄物・狂言詞章・キリシタン資料の言語を観察すると、ヤ行音の動揺が一つの顕著な事象として認められる」として抄物における語例を挙げ、その中に複合動詞についても言及がなされている。それによれば、複合動詞「～カエス」（返）「～アウ」（合）「～アル」（有）において母音連続が生じ、その結果、「～カヤス」「～ヤウ」「～ヤル」という語形が現れる。しかし、全ての語においてそのような現象が生じるわけではなく、その違いについては複合語としての複合度の強弱と表記法の問題とがかかわってくるとされ、二つの動詞が融合して一語として発音されるようになって、先のようなヤ行音も生まれることになったとする。したがって、このような現象もその時期、古代に比べ、複合動詞の結合がより緊密化していることの現れであると見られる。

さて、そのような接合型アクセントは現在でも各地の方言に残存している。そのようなことから見ると、接合型アクセントであっても十分、語と同様の機能を果たし得ていたと考えられる。しかし、秋永一枝（一九九六）「東京・芦安両アクセントにみる接合型の衰退」『国文学研究』一一八、上野和昭（一九九七）「接合アクセントから結合アクセントへ―徳島市内における複合動詞アクセントの調査から―」『島田治還暦記念論文集　言葉と文化』島田治還暦記念論文集刊行会、によれば、その各地の方言に見られる接合型アクセントは急速に失われ、東京式、あるいは京都・大阪式と同じアクセントへと変化しつつある。つまり、これは中央語における変化と同様の変化がその周辺の地域においても進行していると見ることができる。したがって、中央語もそれまでの接合型から結合型へと変化したと考えることができる。このようにアクセントや連濁など音声の面における変化から見ると一貫して動詞間の結合の緊密化が進行しているということが見て取れる。

また、意味の面からの分析においてもそのような傾向は首肯される。《開始》《自動的移動》を表わす「―出す」や《動作の継続》を表わす「―続ける」、そして、《強調》の意を添える「―入る」など、本来、もととなる動詞には存在しない意味はいずれも中世以降現れ、中古以前には単独で使用される場合と同じ意味でしか使用されない。つまり、この結果は中古以前における複合動詞の意味は複数の動詞の意味を結び付けることによって形成されたものであることを示していると考えられる。

中古には次のように現在の感覚では《すっかり寝る》という意味で捉えられる「寝入る」に「いささか」という程度性の弱いことを示す副詞と共起する例が見出せた。このことからすると中古における「寝入る」は寝た後の結果状態を表現しているのではなく、動作や状態変化の進行過程に焦点を当てた表現と考えられる。したがって、その後項「―入る」は動詞「入る」の意を何らかの形で保っていると考えられた。

1　あか月がた皆うちやすみたり。君（光源氏）も、いさゝか寝入り給へれば、そのさまとも見えぬ人きて（『源氏物語』須磨）

とすれば、中古における「一入る」は同じ《位置変化》という意味を担っていたとしても「走り入る」などの場合は《具体的な位置変化》を、「寝入る」の場合には《抽象的な位置変化》をそれぞれ表わしていたということが推測される。その際、それがどちらの意味になるかを決定するのは前項の動詞である。つまり、中古においては同じ動詞の意味が前項の動詞によってその後どのような文脈が展開していくのかによって変容すると考えられるのである。

2　「立ち出でゝ、一夜の、心ざしの人に逢はん。ありし渡殿も、なぐさめに見んかし」と、（薫は）思して、御前を歩み渡りて、にしざまにおはするを、御簾の内の人は、心殊に用意す。（源氏物語・蜻蛉）
3　と、たちかへりたちかへり聞こえさせ給へりしを、上、御覧じて、「むかしより名だかきを、ゆかしう思ひわたるを、いかで見侍らん」と、せちにきこえさせ給しかば、（夜の寝覚・巻三）
4　院のおはしましゝにも劣らず、いたづらなる屋なくかけ渡し、水の流れも心ゆき、池の面澄み渡り、松の緑もけざやかに見え、いみじうおもしろくめでたし。（栄花物語・巻三六）

本来は《人の移動》を表わすと考えられる動詞「渡る」が他の動詞と結合する際、2の例では《移動》、3の例では《時間的な広がり》、4の例では《空間的な広がり》などと異なって解されるのも、同様の原理によると考える。つまり、動詞が他の動詞に結合する際、本来の意味が先行する動詞が作り出す文脈に影響されて変容する場合があるからである。後項動詞として中古に生産性が高かった自動詞にはこのような現象が生じやすい。中古にはこのような複合動詞表現が発達していたと考えられる。

それがなぜ「一入る」は《すっかり～する》という強調の意味を前項の動詞に添えるという機能を持つに至ったのであろうか。それは、そのような抽象的な場において実現されていた「一入る」の《位置変化》という意味が、後の時代においてはそのような意識は薄れ、全体の意味は理解できても構成要素の意味がはっきりと理解することはできないという事態に至ったからであると考えられる。そのような状況下においては、例えば「寝入る」から分析される「一入る」の意味は動詞「入る」の《外から内への位置変化》という意味と乖離し、解釈のゆれが生じやすくなる。すると、本来、もとの動詞には存在しない新たな意味が生じる素地が生まれると考えられる。したがって、新たな意味が中世以降生まれるということは中世・近世にかけて動詞間の結合が増した結果に他ならないと考える。

構成の面に関しては中古においては自動詞が後項として多くの複合動詞を形成していたのに対し、中世以降、それが多くの表現を形成し得なくなり、その代わり、他動詞が多くの表現を形成するようになったということが指摘できる。それは中古以前には許容されていた、複数の動詞の主語が異なると見られる複合動詞が中世以降は許容されなかった結果であると考えられる。これも動詞間の結合が次第に緊密化したことの現れであると考えられる。

結合が緩やかな時代においては、そこに文脈や意味上の主体を含意することが容易である。むしろ、含意しなければ表現が成り立たないという面もある。したがって、そのような時代においては《大勢の人間の出入り》を表わす「出で入る」や、対立概念を結合させた「見聞く」など、現代語には存在し得ないような表現も可能となる。しかし、その後、結合が緊密になっていくと単一の語に意味的な主語の異なる構成要素が存在することは記憶の負担が重くなってくる。すると、そのようなものは次第に記憶の負担に耐えられなくなり、使われなくなるという結果をたどったと考えられる。「出で入る」や「見聞

く」が「出入り」「見聞きする」といった風に名詞化した形でしか現代語に存在し得ないのはそのような事情による。

論文審査結果の要旨

本論文は、全六章からなり、末尾に参考文献を添える。

第一章では、本研究の目的、方法、意義などについて述べる。「走り去る」のような「動詞＋動詞」型の複合動詞がいかなる史的変遷のもと、現在のような形態となったのかということを明らかにしようとするものである。そこでは個別的な語例をもとに考察することは言うまでもないが、それを超えて、集合体、カテゴリーとしての複合動詞の性格及び史的変遷の結果としての現在を明らかにするというところに重点を置いている。また、語法、意味の面、動詞間の構成の面からの考察にとどまらず、音声、結合度といった形態的な側面にも注目し、その史的変遷の全体像を総合的に明らかにしようとする。日本語の述語において重要な役割を担うのは用言である。その中で多くを占めるのは動詞であり、その動詞を取りあげることは日本語の構文及びそれによって広がる表現の世界を明らかにする上で意味のあることである。

第二章では、複合動詞の研究史について述べる。

第三章では、音韻史に関する先行研究に拠りながらアクセントを中心に音声の面に現れた変化を明らかにした。平安時代後期の『類聚名義抄』のアクセントでは、それぞれの動詞のアクセントをそのまま接続したものである。これは、中世前期の『浄辨本拾遺和歌集』のアクセントと同じである。中世後期では、『補忘記』、近世では、『平曲譜本』には、アクセントの高く発音される部分が一つになるように調整された新しい接合型アクセントが見られる。したがって、中世後期に至るまではそれぞれの動詞のアクセントをそのまま発音したものであったが、中世後期以降それが変化したものと推定されるとする。そのようなアクセントは現在でも各地の方言に残っていることから十分まとまりを有していたもので、その後、単純動詞と同じアクセント型へと移行したものと推測する。

第四章では、意味派生における変化を明らかにしようとする。現代語においては、複合動詞後項「―出す」「―続ける」は、他の動詞に「開始」「継続」などの文法的な意味を添える機能を持っている。また、「恐れ入る」や「恥じ入る」における「―入る」は「外から内への位置変化」という本来の意味を失い、強調の意味を添えるものとなっている。そのような意味派生がどのように発生したのかということについて考察している。その結果、これらの意味で使用された「―出す」「―続ける」「―入る」は、中古の資料では見いだせず、中世以降の資料でしか見いだせなかったとする。これは、中古以前における複合動詞の意味は、複数の動詞の意味を結びつけることによって形成されたものであることを示唆する。そしてまた、この事実は、アクセントの歴史的推移とほぼ並行するものであると言える。このようなことがどのような要因によって派生したかについても述べる。これらのうち「思う」や「言う」や「聞く」など具体的なモノと結びつかない動詞と結合したものは使用され続けるうちにそれがどのような意味を担っているのかということがわかりづらくなっていったものと思われる。「運び出す」などの「―出す」は具体的で意味内容が捉えやすいが「思い出す」の「―出す」はあまり具体的ではなく、その意味内容が不明確である。つまりこのような意味の違いが新たな意味を生む下地となったのではないかと考えるのである。既存の結合のなかに新たな意味が生まれ、その構造を利用した新たな語が生まれることによってその意味が確立したと考えるのである。

第五章では、複合動詞における構成法の変化を後項動詞の生産性の推移から明らかにしている。その結果、中古においては自動詞の生産性が高かったもののそれが時代が下るにつれ、衰退し、他動詞の生産性が高くなっていくとする。その境は中世であるとするのである。近世でもやはり他動詞の生産性は高い。現代語においては、生産的な後項動詞は、「—始める」「—出す」「—得る」「—かける」「—切る」「—続ける」など他動詞が圧倒的に多くその傾向は中古と逆である。これは、中古においては、二つの動詞の主語が異なる結合が許容されていたのに対して、中世以降はそれらが許容されにくく排除されたという結果を反映したものと理解される。したがって、後代では、中古と異なり、複合動詞における二つの動詞の主語を同一化しようとした欲求が存在したと考えられるのである。中古に存在した主語の一致しない複合動詞が衰退した結果、似通った意味内容を表現するために「自動詞＋出づ」に対し「他動詞＋出す」のような表現がより多く生産されたとするのである。このような複合動詞の全般的な傾向から言えば、中古の言語表現において主語が一致しないものが許容されるということは、とりもなおさずその時代には、現代語における複合動詞とは異なり結合がそれほど緊密ではなかったという証拠であると考えられるとする。古代における「動詞＋動詞」は、構文レベルで生成されたものと考えている。これは、複合動詞の史的変遷に関する重要な指摘である。

第六章では、第三章、第四章、第五章を通して明らかになったことを踏まえ、複合動詞全体の史的変遷に見出せる傾向を指摘する。それは、複合動詞内部の結合が緩やかなものからより緊密なものへと変化したということである。中世以降、アクセントの高く発音される部分が一つになったことや、後項にそれまで見られなかった文法的意味や強調の意味が派生することや、意味上の主語が一致しない動詞の結合が許容されなくなることは、すべて複合動詞の結合がより緊密な状態へと変化したことによって生じた変化である。したがって、現代日本語においては緊密な語となっているが、中古以前においてその結合は緩やかで形態論的には複数の動詞を連接させたものと結論づけることができる。それは使用され続けることによって個々の表現が固定化したことも一因であるが、新たな造語が行われ、語構造の連環が形成されたことによるものと考えられる。そしてその背後には派生法中心であったそれまでの動詞語彙の生産方式が飽和状態に達したために生じた語彙体系内の要請が存在していたと考えられるとする。

以上、本論文は、これまで歴史的分野における複合動詞研究が、特定の表現の意味用法、もしくは特定の資料内における複合動詞の語構造、他の資料との語彙的な異なりを明らかにするのにとどまっていたのに対して複合動詞に全体に発生した歴史的変化を明確に明らかにしたものである。複合動詞が緩やかな結合からより緊密な結合に変化したとするものである。その時期は中世以降であると推定している。この研究成果は、これまでの研究を大きく前進させたもので複合動詞の研究のみならず日本語史研究に寄与し、かつ新生面を開くものということができる。

よって、本論文の提出者は博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。